

ジョン・デューイのインタラクション理論再考

教育学研究科学校教育学専攻 齋 藤 直 子

John Dewey's Interactional Theory Seen in a New Light

Naoko SAITO

John Dewey (1859-1952) is an American philosopher and psychologist who perceives life as integrally interacting with the environment. In Dewey's theory of interaction, human beings engaged in interaction with the environment demonstrate active power ; human beings are not at the mercy of the surrounding environment and they develop their power because of interaction with their environment. This presents a question : why and how does Dewey think human beings grow powerful in the process of interaction with the environment, rather than being dissolved by the power of surrounding environment?

I will give conclusion to this question through the following two perspectives : (1)how Dewey treats nature and physical objects in interaction with human beings, and (2)how, in Dewey's idea, human beings perceive the surrounding environment as they interact with it, especially in the initial phase of interaction.

目 次

序論：環境とインタラクションする人間

2. 人間と自然の“可能性”の実現の意味——アレクサンダーのデューイ解釈

3. 両面的にとらえられる自然——ヒックマンのデューイ解釈

4. デューイの描く自然とモノの世界

5. インタラクションの世界感覚——原初経験を中心に
結論そして新たな序論：“I experience.”へ

序論：環境とインタラクションする人間

——生命は環境の中で生起する。環境の中¹⁾というだけでなく、環境ゆえに、環境とのインタラクションを通じて——ジョン・デューイ「経験としての芸術」²⁾

ジョン・デューイ (1859-1952) は、人間と世界のあり様を、有機体としての人間と環境のインタラクションという考え方で一環して論じた思想家である。ひとことにインタラクションといっても多様な形があり得る。デューイのいうインタラクションは、精神と世界という独立した二項が相互に働きかけ合うという意味でのインタラクションではない³⁾。それは、“自己が客観的状況と相互浸透 (interpenetration) する” (AE, p. 67) 状態と表現される。有機体と同様、環境も一枚岩的に静的に存

在するのではなく、両者は多様な要素が随時変化しながら影響を与え合う。また、デューイが“環境”や“客観的状況”というとき、そこには、自然的なもの和社会的なものが共に含まれる。彼は自然的・生物学的なもの和社会的なもの (人間相互の社会交渉の過程) をインタラクションの論理で連続的にとらえる。このインタラクション理論は、哲学的には、主観と客観の二元論を越え、心理学的には、人間の“内”的意識や感情が“外”界から切り離されて単独に存在すると考える内観主義・構成主義的心理学を、“心理学的個人主義”として批判しアンチテーゼとするものである。すなわち、“本来的に別個の魂、精神、あるいは意識を扱う伝統的心理学は、実は、人間性を自然的客観的關係から切り離す諸条件の反映である。それはまず人間を自然から切り離し、次には同胞から切り離すことを意味する”⁴⁾。インタラクションによって世界と人間をとらえようというデューイの試みは、“本当に生と呼べる生の中ですべては重なり融合する” (AE, p. 18) という主張に表されるように、十全なる生命活動の理解への希求に支えられていた。“花は、土と空気と湿気と花を産物とする種子のインタラクションについて知らなくとも楽しむことはできる。しかし花はインタラクションを考慮せずしては理解することはできない” (AE, p.12)。このような世界観をもつデューイは、自然と知識のエコロジカルな見方を最初に提示したひとりである、とも評されている⁵⁾。ではデューイのインタラクション理論の特色とは何であろうか。

それはひとことでいえば、「活動の主体としての人間の力の大きさ」ともいうべきものである⁶⁾。もちろん、インタラク션을基本とするデューイの理論は、人間は環境に包括され、これに依存する、という考え方で一貫している。“自己による素材のコントロールは、単なる“精神”以上のものによるコントロールである。それは、そのうちに精神を包括するパーソナリティによるコントロールである。すべての関心は自己と客観的世界、人間を包み込む自然の物質的側面との一致 (identification) である” (AE, p. 277) と、述べられるように、人間の精神活動があくまで外界の事物につながり認められて初めて意味をもつものであることが強調される。しかし、にもかかわらず (あるいは、「それゆえに」というべきかもしれない)、エコロジカルなデューイのインタラクシオン理論は、エコロジカルな構造の中で、人間がいかにモノや自然を利用し、それに意味や目的を発見してゆくか、その「人間の力」を浮き彫りにする。いわば生態系の中でアクティブに活動する人間をクローズアップし、インタラクシオンの構造のなかでスポットライトをあてられているのは、人間であるように見受けられる。デューイのインタラクシオンは、「活動主体としての人間の力」をインタラクシオン自体の中に解消しない。自己は“透明” (transparent) (AE, p. 283) にはならず、インタラクシオン「ゆえに」発見され力を与えられてゆく。

デューイ哲学が「活動主体としての人間の力」という印象を与えることは、デューイへの批判や評価の一部にも現れる。例えばパウワーズ (C. A. Bowers) は、デューイが彼の時代の文化的・イデオロギー的想定に埋め込まれたいと評する。その想定とは、“進歩主義的な変化の性質、人間のできごとをコントロールし、指揮する合理的思考の有効性、科学的方法の改良主義的效果、社会が加速度的変化を取り込みうる能力”である⁷⁾。同様に、ウエスト (Cornel West) も、エマソンのプラグマティズムの流れを受け継ぐ哲学者としてデューイを位置づけ、“楽観主義と力の秘蔵”に象徴される哲学者として彼を描いている⁸⁾。また、アレクサンダー (Thomas M. Alexander) は、デューイ批判の一派として、デューイによる「人間の力」の強調に対する批判者がいることを指摘する。例えば、デューイと同時代の哲学者サンタヤナ (George Santayana) は、デューイが自然への畏敬の念を欠き、すべてを人間の問題にひきつけて自然を説明しようとした、と批判した。また、コーエン (Morris Cohen) は、サンタヤナと同じく、デューイが人間経験のカテゴリーで自然を記述しようとした「人間中心の自

然主義」 (anthropocentric naturalism) であったと批判したという (AX, p. 63)。このように、デューイの原典及びその諸批評の一部から、人間と環境世界を独立した二項として扱わないデューイのインタラクシオン理論において、「人間の力」が結果的にクローズアップされていることがデューイのインタラクシオン理論独自の特色とってよかろう。そしてこの特徴にこそデューイのインタラクシオン理論の真髓があり、同時に謎がはらまれている。その謎とは次のように整理できる。

デューイは、一方で主観主義を批判し、人間の側へのみ焦点をあてることをしない、という意味で、人間を自己へのとらわれから解放して外界へとつなぐ見方を提唱した。それは、リアリティの構築をインタラクシオンの過程で生ずる状況にゆだねる構造をもつ。“態度、傾向性のたぐいは…別個の実態ではない。それらはいつでも状況とモノについてのものであり、状況とモノからのものであり、状況とモノへと向かうものである”⁹⁾。他方で、あるいは同時にそれが、批判的知性に象徴される人間の意志と力の哲学として人間に焦点をあて、決定論に陥らず、活動の主体としての「人間の力」をクローズアップすることになるのは、一見パラドクシカルにも思われる。この二側面をデューイはいかに整合的に説明しているのか。状況にゆだねることと、人間が環境にアクティブに働きかけ、その状況を変える力すら発揮することは、どのようなしくみによって可能になるのか。インタラクシオン「ゆえに」人間にこれだけの力が付与されることの仕組みをデューイはどのように説明するのか。それはどこまでインタラクシオン理論を徹底させるものなのか——デューイのインタラクシオン理論をめぐる謎はこうした問いに集約される。

本稿では、「人間の力」が発揮されるごく原初の段階、しかもひとりの人間に世界がいかに立ち現れるかという基本的レベルで、デューイの理論に基づき、インタラクシオン「ゆえに」「人間の力」が発揮されるしくみを解明する突破口を開くことを目的とする。その際、以下の二つの観点を中心に考察を進める。(1)「人間の力」と共にインタラクシオンの重要な構成要素である、環境の中の自然やモノをデューイがどう扱っているか、(2)インタラクシオンに関わる人間の世界感覚とはデューイの考え方にあってはどのようなものであるか、ということである。その最初の試みとして、最近のデューイ研究の中から、この二点に関するヒントを与えてくれるアレクサンダー (Thomas M. Alexander) とヒックマン (Larry A. Hickman)¹⁰⁾ の研究を選び、(1)と(2)の観点に着目して彼らがいかにデューイのインタラクシオン理論を説

明しているかを考察する。次に、デューイの原典の中から芸術論を中心にふたつの観点について、アレクサンダーとヒックマンが照らし出していない部分を更に明らかにしてゆく。

2. 人間と自然の“可能性”の実現の意味——アレクサンダーのデューイ解釈

デューイのいう有機体と環境の“相互浸透”が意味するところを、その“経験”と“自然”概念の関係から明らかにしているのがアレクサンダーである。彼によれば、“経験”と“自然”の関係をめぐって、デューイは自然主義者か、实在論者か、物質主義者か、観念論者か、とこれまで多くの議論がなされてきた。それは主として、認識論的問題として、デューイの“経験”が直接的(immediate)で不可知的(unknowable)であると同時に、媒介的(mediate)で関係的な知識が関与するものであるというパラドキシカルな二側面をもつものであること、及び、形而上学的問題として、人間経験から独立した自然の存在というカテゴリーを認める自然主義(naturalism)と、人間経験を基点とする観念論(idealism)がいかに相容れるのか、という問題によるという(AX, pp. 62-69)。アレクサンダーは、この一見アンビバレントに思われる“自然”と“経験”の“連続性”(continuity)にこそ、デューイの経験概念の鍵があると主張する。

彼によれば、デューイの“経験”の概念においては、経験の原初状態は、主客の区分を立てることのできない未分化の全体的状況である。この全体としての状況の質は、デューイによって“直接的”(immediate)と表現される(AX, p. 80)。アレクサンダーは、この原初的・直接的な生命世界は、“そこにあり、我々はそのうちにいる。それは我々が状況の中にあるあり方——いわば状況そのもの——であり、究極的なものである”(AX, p. 81)と説明する。そして、メルロ＝ポンティ(Merleau-Ponty)というところの“前反省的”(prereflective)(AX, p. 80)という概念や、ポラニィ(Polanyi)の“暗黙の次元”(AX, p. 93)とひきつけて、“前分析的な文脈”と表現する(AX, p. 80)。この非認識的(non-cognitive)直接的状況の中で反省は始まり終結する。よって、状況は直接的であると同時に媒介的である。アレクサンダーは、“世界について知る以前と以後に、世界は『被り楽しまれる』ものとして出会われる”(AX, p. 128)、“世界は我々の探求と反省の時にそうである以上のものである”(AX, p. 89)として、探求に先立

ちこれの下敷きともなる原初経験の生命世界の存在をデューイの理論の中に見いだす。こうした構造の中で、知る活動とは、状況の可能性を探求活動によって実現してゆくことであり、知る対象は、探求活動が始まった時の素材から異なるものへなっていくという(AX, p. 85)。デューイが経験の局面を“*It experiences.*”と“*I experience.*”に分けていることについては、“経験は‘*It experiences.*’から始まる”，そして人が行為の責任を引き受けて初めて“‘*I experience.*’あるいは‘*I think.*’”ということがふさわしい”(AX, p. 135)と解釈される。このようなデューイの“状況”についてのアレクサンダーの解釈は、“状況”は、最初はそれがなければ何も始まらない出発点であるが、同じものとしては二度と後戻りのきかない可変的な世界であることを示しているといえよう。

こうした解釈に基づき、アレクサンダーはデューイが“可能性”を特色する“創発的自然主義者”(emergent naturalist)であると位置づける(AX, p. 91)。そして、デューイの意味する“可能性”の実現を、下記のデューイの言葉を引用して明らかにする。

…まず第一に否定的ないかたをすれば、…
[自然の中のすべてのモノにあてはまる] 発達は以前に暗示的・潜在的であったものを開示するプロセスではない。肯定的ないかたをすれば、可能性は存在のカテゴリーであることが含意される。というのも、発達は、ある時点では実現していない力や能力を個人がもっていなければ起こりえないからである。しかしそれはまた、これらの力が内側から開示されるのではなく、他のモノとのインタラクションを通じて呼び起こされることをも意味する。可能性のカテゴリーを個性の特色として復活させることは必要であるが、それは古典的アリストテレス的公式とはちがった形で復活されなければならない¹¹⁾。

可能性は、他のモノとのインタラクションの結果において考えられるべきである。ゆえに、可能性はインタラクションが生じた後までは知られることはない¹²⁾。

これらの引用から、アレクサンダーは、デューイのいう“可能性”が固定された。あらかじめ決められた目的としてもともと内側にあるものが外側に現れる、という従

来の“可能性”観でないこと、それが“変化の特性”¹³⁾であることを明らかにしている。そして、“可能性”を自然の中の可變的、偶発的、不確定の要素と考えるパス(Charles S. Peirce)と並べて、こうした見方が、“結果と可能性が世界の本当の要因であると考えられるような自然解釈に基づく”プラグマティズムの哲学の特色でもあることを示している(AX, p. 101)。デューイは自らの立場を“プラグマティックな实在論者”¹⁴⁾とある論文で称している。“可能性”を存在のカテゴリーとしては認めるが、その意味がインタラクションの行為の過程を通じて、その結果として明らかになる、という上記のデューイの引用とアレクサンダーの解釈は、デューイの“可能性”観に象徴される“プラグマティックな实在論”の意味を明らかにしているといえよう。

自然の存在は可變的であり、人間の参加と働きかけを通じて“そのすぐ前の生命形態にはない特性”を表してゆき、“意味のできごとに入ってゆく可能性をもっていた素材の再組織化と利用”(Ibid.)がなされる¹⁵⁾——これが、デューイのいう“経験”と“自然”の“連続性”の意味である。アレクサンダーは、この“連続性”の原理こそが、ヨーロッパ哲学における純粋な“モノ自体”という考えからデューイの哲学を分かち特色であると指摘する(AX, p. 108)。そして、インタラクションの過程それ自体が、自然の“可能性”の実現であると同時に人間の“可能性”の実現でもあるという、“状況”を基盤にしたデューイのインタラクションのしくみを明らかにしている。

本稿のひとつの観点である、「自然やモノの世界をインタラクション構造の中でデューイがどう描いているか」という点について見てみると、アレクサンダーは、デューイにあって、自然が構造的にインタラクションを支える不可欠の要素であることを示している。(ただし、“デューイは自然の総称的特性のリストを挙げていなかった”し、“経験的探求によって出会われるという以外、いかにしてそれら[特性]に到達しうるかも述べていない”(AX, p. 89)と述べる。)そして、人間にとっての自然の不可欠性と、人間と自然の連続性を前提にした上でアレクサンダーは、“自然の新しい力と局面は、世界と人間の状況の可能性を探求し、発見し、決定する我々の活動によって現わされる”(AX, p. 96)と述べて、自然の可能性を実現してゆく、いってみれば「アクティブな人間」の姿をデューイの中に見い出し、描き出している。そして、“デューイにとって状況は、第一義的に人間の状況を指す。人間に関する状況が、もっとも十全に自然の可能性を実現し、開拓するからである”(AX, p. 108)

と述べ、“‘状況’はデューイにとっていつでも意識的な人間の参加を含む。もし人間がいなければ…自然の中に状況はないだろう”¹⁶⁾というギューインロック(James Gouinlock)の言葉を引用している。つまり、アレクサンダーのデューイ解釈に従えば、構造として人間経験は自然と連続的であるという事実は押さえた上で、人間はアクティブな意味付与の主体であるということになる。

本稿のもうひとつの観点「インタラクションに関わる人間の世界感覚」についていえば、アレクサンダーは特にこの点を明確にしていらない。原初経験の形を“謙虚な始まり”と表現してはいるが、しかし少なくとも人間にとって自然は、「身を委ねる」ような感覚でとらえられる存在ではないことが読みとれる。人間によって何らかの力を与えられる存在として横たわっているのでもない。アレクサンダーは、禅における主客の区別が消える悟りの瞬間を、岩と雪と波が過去から未来へ向かうある一瞬に融合するようすを描いた俳句を例に挙げる。そして、この世界が、過去を吸収し未来へと向かう現在を、十全に生きられた瞬間として描くデューイのものと同じであると指摘し、“経験はアクティブで敏捷な世界との交渉である”¹⁷⁾というデューイのことばを引用している。果たして、デューイのインタラクション構造で捉えられる“アクティブで敏捷な”人間は、禅の世界が描くように主客の区別が消え、人間がいわば透明になるようなありかたと同じものなのであろうか。

アレクサンダーのデューイ解釈から生ずるこうした一連の問いを、デューイの原典に即し、再度検証する前に、アレクサンダーよりさらに詳しく、自然やモノの世界について語っているヒックマンの研究を見てみる。

3. 両面的にとらえられる自然——ヒックマンのデューイ解釈

ヒックマンもアレクサンダーと同様、人間と外界の存在(自然的存在、人工物)とのインタラクションが生ずる状況という観点から、当時の实在論でもなく観念論でもないデューイの“道具主義”(instrumentalism)の意味を明らかにしている(HK, pp. 31-33)。ヒックマンはデューイの道具主義を“人間であることは生産に関与し、自然が与えるものを進展させ、我々自身を共につくり(con-struct)、テクノロジカルになることである”(HK, p. 76)と定義する。そこでは、直接的経験をコントロールしそれを豊かにしてゆくための道具として知識がとらえられる。そして、モノは目的を達成するため

の手段となるときオブジェクトになる (HK, p. 87)。アリストテレスのテクネにあたるデューイのテクノロジー、生産的技術は単なるモノではなく“具体的な諸活動の総和であり、多様な形態で探求に従事する人々による生産物” (HK, p. 202) である。そしてテクノロジーは、“人間と自然のつながり、インタラクシオンあるいは自然の一部としての人間のつながり、インタラクシオンを引き出す” (HK, p. 74)。

さて、テクノロジーという観点からとらえられるデューイのインタラクシオンにおいて、ヒックマンはデューイにおける自然の扱い方をどのようにとらえているのであろうか。ヒックマンはアレクサンダーと同じく、状況の中で意味が実現することを指摘し、自然を固定された本質としてでなく、あくまでインタラクシオンという観点からとらえる。また、デューイが世界の中に人間の知識活動によってとらえられない非認知的領域 (non-cognitive) を認めているとする点もアレクサンダーと同様である。しかし、ヒックマンはアレクサンダー以上に、デューイにとっての自然がいかなるものであるかを詳細に描き出している。それによると、一方で、デューイの経験概念における素材は人間の意図を離れてもそれ自体で成長する。“それは、具体的な生産活動を通じてのみ表現を見いだすことができる。しかしその時点ですでにかなり成熟し、発達している” (HK, p. 76)。庭に咲く花や草はそれ自体ただ成長し、“庭師がほとんどあるいは全くコントロールできない何かが進行している” (HK, p. 77)。ヒックマンは、この点を多くのデューイ研究者は見逃しているが、前述のアレクサンダーはこの点を押さえていると述べる。ヒックマンはこの観点から、デューイが、自然の存在が人間の活動への制約的側面をもつものであることを認めていなかったわけではない、と主張する。自然の存在物はある傾向性をたたえたものとしてある。そして人間の活動を制約する。

しかし、この制約的側面は、決定論にはいたらない。デューイは自然自体に始まりと終わりしか認めていないとヒックマンは述べる。自然の存在物は、人間によるコントロールの可能性を認めるものとして、その意味が実現されることを要求する。ある傾向性をたたえた自然の存在物と折り合いをつけてゆくことが人間の探求活動である。この活動によって、単なるモノが人間の目的にそぐうべくオブジェクトになってゆく (HK, p. 88)。そこには、自然や神的力に翻弄される無力感はない (HK, p. 90)。人間は、自然の中の決定的要素に気づいているが、この認識は、“環境的力のある程度超越する能力と結びついている” (HK, pp. 155-6)。

ここでデューイの思想の背景として着目すべきは、ヒックマンが挙げる、当時のアメリカの進化論との関係である。ヒックマンによれば、スペンサーの進化論がアメリカに最大の影響を与えていたのは1882年頃だという。アメリカ流のスペンサー理論は当時のアメリカにおいて産業社会における強者の生き残りという決定論的考え方を生んだ。デューイは、このアメリカ流スペンサー理論を、スペンサー自身の理論 (= 固定された環境への人間の受け身的適応) と共に批判し、“自然は不安定なものと安定したものが絶えず混合した状態によって特徴づけられる”¹⁸⁾ と考え、自然は完全に必然的でも完全に偶発的でもないという見方、人間の介入によってのみ不安定なものが安定してゆく、という見方を提示するにいたったのだという (HK, pp. 180-1)。

以上のように、ヒックマンが描き出すデューイにとっての自然は、環境条件の絶対的支配が不可能であるという意味で、制約的側面をもつと同時に、人間のコントロールの対象としてある。ヒックマンは、“デューイは、決定論者と非決定論者の存在論的想定を同様に否定した” (HK, p. 154) と述べて、デューイが自然を両面的にとらえていることを明みにだしている。ここでアクティブな力を人間が実現するのは、デューイのインタラクシオン構造にあっては、自然の存在あってのこと、ということになる。しかし、だからといって、自然の存在を「人間の力」の「原因系」として固定することはできない。あくまで、両者のインタラクシオンの中で状況的に同時に、自然の“可能性”と人間の“可能性”は実現されていく。この構造を基本とした上で、ヒックマンのデューイ解釈は、アレクサンダー同様、アクティブな活動の主体として生産活動に従事し、自然の“可能性”を実現してゆく「主語」としての人間の姿を浮き彫りにしている。人間は、自然に支えられながら完全にこれに身を委ねることをせず、安住しきらず、活動し続ける。

ヒックマンは、このように、アレクサンダーより一歩踏み込んだ形でインタラクシオンにおける自然やモノの重要性を浮き彫りにしている。(もっとも、両者の描き出すインタラクシオンの構造それ自体は一致している。)そして、それは、本稿のもうひとつの問いである「インタラクシオンの世界感覚」を理解する上での手がかりを与える。ヒックマンは、インタラクシオンにおける人間に「無力」(impotency) 感はないと述べた。ここから推測される、インタラクシオンの中の人間の世界感覚は「力の感覚」ともいえる。もしそうだとすれば、「力の感覚」は、アレクサンダーいうところの経験の原初段階 (“It experiences.” の段階) にもいえることなのであ

ろうか。経験の全過程を通じて、インタラクシオンに関わる人間は「力の感覚」に満たされ、いわばアクティブに環境に関わるのであろうか。「力の感覚」は、「人間の力」に焦点が当てられるデューイのインタラクシオンのしくみの裏付けといいきってよいのであろうか。以下、アレクサンダーやヒックマンの自然やモノの描き方を再度デューイの原典に即して検証し、最後に両者が明確にしていなかったインタラクシオンに関わる人間の世界感覚を、デューイの原典を通して明らかにしてゆく。

4. デューイの描く自然とモノの世界

有機体と環境のインタラクシオン「ゆえに」「人間の力」が発揮されるしくみをデューイがどのように説明するのかを、(1)インタラクシオンの構造の中で自然やモノはどのようにとらえられるのか、(2)インタラクシオンに関わる人間の世界感覚はどういうものなのか、という二つの観点から、アレクサンダーやヒックマンのデューイ解釈を通じて見てきた。彼らの考察は特に(1)にヒントを与える形で、理論的な構造分析としてデューイの思想に着実にインタラクシオンのメカニズムをいわば「外側から」明らかにしている。しかし(2)の観点については、はっきりしない点が残った。すなわち、インタラクシオンに関わる人間の世界感覚は、絶えず「力の感覚」に満たされ積極的に環境に関わりこれを変えるようなものなのか、あるいは、何らかの調和や委ねの感覚が支配的なものなのか、という点である。あるいは、それが「力の感覚」であったとしても、デューイの思想によみとれる「人間の力」はいかなる含意をもつものなのか、「力」の性質ははっきりとしない。それは、インタラクシオンの中で「なぜ」「どのように」「人間の力」が発揮されるか、という構造についての外側からの分析というよりも、デューイにおけるインタラクシオンの質的な様相、インタラクシオンで世界をとらえることは結局人間がどのような状態で世界に関わることを意味するかという、いわばインタラクシオンを内側からとらえる見方であり、後付け的解釈の領域に属する問題といえよう。外側から観察されるインタラクシオンを、視点を変えて内側からのぞいてみることは、インタラクシオン「ゆえに」「人間の力」が発揮されるとはどういうことであるとデューイが説明しているかを別の角度から照らし出すであろう。

この問題を考えるにあたってふさわしいと思われるのが、デューイの晩年の作品「経験としての芸術」(Art as Experience, 1934)である。この著作はインタラクシオンの意味を、理論分析はさることながら詩的描写に

よっても表出している。デューイは芸術に顕著に現れる美的な質 (esthetic quality) を日常経験と切り離して考えない。“esthetic”ということデューイが表そうとしているものは、十全に生きられた時の我々の日常経験の姿である。“esthetic”でない状態は、「無気力」(apathy)、「無関心」(indifference)、「偏見」(prejudice)、「傲慢さ」(conceit)、「日常茶飯事的緩慢さ」(slackness of routine) (p. 104)、「ステレオタイプ」(p. 260)などと形容される。これらは我々が十全に世界を生き、経験しておらず、世界をその質と奥行きでとらえられていない盲目の状態であり、デューイは我々の日常経験はしばしばこうした状態に冒されているという。このように“esthetic”という観点から経験をとらえる同書は、知性を行使する「人間の力」を包み込む豊かな人間経験の奥行きを読者である我々に伝える。ゆえに、インタラクシオンの世界感覚という解釈にふれる問題には、こうした詩的描写が多く示唆を与えてくれるにちがいない。そこでまず本章では、この原典を中心に、自然やモノの描かれ方をデューイに即して再検証してみる。次章では、インタラクシオンの世界感覚をデューイの詩的記述の中から読みとってゆく。

「経験としての芸術」では、アレクサンダーやヒックマンが描き出す以上に明らかに、インタラクシオンが、人間の側からのみならず自然やその中のモノの側からも、いわばこれらを「主語」にする形で描かれている。そこには、下記のように、自然もエネルギーをたたえ、人間と同等の立場でインタラクシオンの構成要素であることが読みとれる¹⁹⁾——“すべての熟考、すべての意識的意図は、ひとたびは自然のエネルギーの交錯を通じて有機的に演じられたモノから生ずる” (AE, p. 24)、“表現されたモノは自然的衝動と傾向性に対して客観的モノが行使する圧力によって製作者から絞り出される” (AE, p. 64)、“それ[感傷とは異なる美的な感情]は表現的な素材によって引き起こされる感情である…例えば自然の事物、景色はそれを引き起こす” (AE, p. 77)、“[自然の中の]輪郭はモノが互いにそして我々に働きかけるやり方を表現している…それらはオブジェクトの属性を携える。…様々な輪郭と、輪郭の様々な関係は、我々の回りの世界とすべての接触における我々の経験の中でそれらの輪郭と、輪郭の関係がなしたことから生ずるすべての価値に無意識に満たされてくる” (下線筆者) (AE, pp. 100-1)。(ただしこの属性は“多様な経験の共鳴である”として、あくまで経験されるものとしての属性という点をデューイは強調している。)また、モノの存在は“客観的論拠” (AE, p. 95)として肯定される

——“見逃されてはならないひとつの制限は、環境の中のモノの質と構造の論拠は残り続けるということである”(Ibid.), “見られる丸さはボールの丸さである。知覚される角度は目の動きの変化のみの結果ではなく操作される本や箱の属性である。曲線は空の弧であり、建物の円蓋である…視覚的に経験される輪郭の特性は目の動きだけに帰すことはできない”(AE, p. 100), “自然と生命は不安定な流転ではなく連続性を表明する。そして連続性は変化を通じて持ちこたえる力と構造を含んでいる”(AE, p. 323)。このように、自然やモノの描かれ方に着目して「経験としての芸術」を読むと、インタラクシオンの構造の中の自然やモノの生きた姿が浮かび上がってくる。そして、デューイが明らかに自然やモノの存在に言及していることが例証される。

しかし、このことは、先のアレクサンダーによる“創発的自然主義”の解釈からも明らかになったように、デューイが自然やモノを不変の実体としてとらえることを意味してはいない。デューイは、当時の实在論を、観念論と共に、“知ることの物理的源(source)あるいは原因(cause)”としての対象と“精神あるいは知る人への表象(presentation)”としての“知られる対象”(things as known)の二元化に陥るものとして徹底的に批判している²⁰⁾。この二元的な“知る人”－“知られる対象”の関係へのデューイの代替案が、“プラグマティック・リアリスト”による、“知られてゆく(things in becoming known)モノは、ある特定の発見可能な質的变化を被る”²¹⁾という立場であった。自然のモノは、探求の対象になってゆく(become)、この獲得された特性(aquired characteristic)は原初の性質の影を薄くする²²⁾。デューイのいう、人間と自然・モノのインタラクシオンにおいては、自然やモノは、“知ることを可能にする独立の外在的“原因”ではなく、インタラクシオンにおけるひとつのきっかけとしての「源」ということができよう²³⁾。その意味においてのみ、自然やモノが“主語”であることが意味をもつ。

では、こうしてとらえられる自然やモノが人間と“相互浸透”するとはどういう状態か。これを明らかにするのが、自然と有機体のエネルギーの融合という観点である。知覚においては様々な感覚が互いに関係しながら連鎖的にエネルギーを伝播する形で働き、“これらの多様な感覚運動エネルギーが互いに調整されて初めて風景やオブジェクトの知覚が成立する”(AE, p. 175)。また、有機体の側のエネルギーには、自然界のエネルギーが関与する。デューイはイギリスの作家ゴールズワージーの、芸術とは“感覚と知覚のテクニカルな具体化を通じて個

人の中にインパーソナルな感情を引き起こし、個人的なものと普遍的なものを和解させるのに役立つエネルギーの想像的な表現である”という言葉を引用する。ここでデューイは、“世界のオブジェクトと出来事を構成し、ゆえに我々の経験を決定するエネルギーは‘普遍的’で”(AE, p. 185)あり、“観賞もまた客観的なエネルギーの構成と組織化を含むので、その感情的な質において同様にインパーソナルである”(AE, p. 186)という解釈を下す。これは、自然界のエネルギーと人間のエネルギーの融合により進行するインタラクシオンを裏付けるものといえる。そして、「人間の力」がインタラクシオンの中で発揮されてゆき、同時に自然のエネルギーが実現されるとは、このエネルギーの融合によって、原初のエネルギーがより洗練されたものへと高められてゆくことに他ならないといえる。これが“本当に生と呼べるものの中ですべては重なり融合する”(AE, p. 18)“相互浸透”の状態である。

ここで、人間の側の感情はインタラクシオンを経て“インパーソナル”になるが、“インパーソナル”の意味するものは、「私でなくなる」ということではなく、「パーソナルさ」が外界に向けて(これを取り込んで)より開かれ、私心から解放されてゆくことであることが着目される。このような意味において、デューイのインタラクシオンの構造は「私らしさ」を消すものでない。逆にインタラクシオンゆえに「私らしさ」は洗練されてゆく。

ここまでは、あくまでインタラクシオンの基本的、原初的しくみの外側からの説明であり、アレクサンダー、ヒックマンの分析と基本的に大差はないことがわかる。残された課題はインタラクシオンの世界感覚である。そこでいよいよインタラクシオンの内側に入ってその世界感覚を味わってみる。

5. インタラクシオンの世界感覚——原初経験の感覚を中心に

最後に、以上考察してきたインタラクシオンの構造の中で、これに関わる人間の世界を看取する感覚という観点から、インタラクシオンにおいて「人間の力」が発揮されることの意味を考えてみる。それは、原初経験における感覚を原点としている。

全体性と融合の感覚

雲がすばやく建てた岩だなの近く
足早の日が捕らわれる

たそがれが編み込まれた生け垣の中で
 一方で恍惚として息もつかず停止した世界が
 永遠の瞑想の時の中にたたずむ
 曲線を描く薄暮の張りつめた静謐の深みの中で
 人間の鼓動は自然のためらいのさだめによって
 止められる
 さながら薄暮の中のひろびろとした部屋にたつ
 彫像のように…²⁴⁾

このデューイ自身の描く自然についての詩は、人間が自然の静謐の中に調和の感覚をもって融合する状態を描き出しているといえる。ポイドストンも、デューイのある詩が自然との一体化を唱うものであることを指摘している²⁵⁾。デューイ自身、“自然は我々の内にあり、我々は自然の内にありその一部である” (AE, p. 333) とのべる。自然と人間の融合、あるいは一体化ということにデューイがこめた意味は、「経験としての芸術」に如実に物語られる。それは、多くの芸術家の引用やデューイ自身の詩的な表現によって、人間の世界感覚を描き出しているといえる。

たそがれどき、曇り空のした、雪でぬかるむ殺風景な広場をとおりぬけていると、とくに幸運なできごとのことを考えていたわけでもないのに、わたしはある種の完璧な爽快さを味わってしまう。不安になるほどうれしいのだ²⁶⁾。

デューイは敬愛する詩人・思想家エマソンのこの引用を“生けるものとその環境との原初的關係の中で獲得される傾向性が活動の中に共鳴してゆく”例とし“この種の経験は我々を、自然の連続性の証となるさらなる思案へと誘う” (AE, p. 29) と述べる²⁷⁾。これは、アレクサンダーが述べるところの、知的探求にいたる以前の直接的状況としての生命世界に人間が触れる時の感覚であり、自然のインタラクションする人間と自然との原初的な融合感覚であるといえる。

ぼくは色と香りと味わいと感触の中に歓喜した。空の青さ、地上の緑、水面の光の輝き、ミルクと果実と蜂蜜の味わい、乾いたり湿ったりする土や、風や雨、草花の香り。草の葉の感触にすらぼくは幸せになった。そして、ある音や香り、とりわけ花の色や、シギダチョウの卵の紫色につやのある殻のような、鳥の卵や羽毛の色、こうしたものでぼくは喜びに酔いしれた (AE,

p. 125)。

デューイは、少年時代を回想したこの詩を唱った詩人ハドソンを、“世界の感覚的表面へのきわめてすぐれた感受性の持ち主” (Ibid.) と評価する。ここで、デューイは、この詩に唱われる少年を、“少年の全存在が、彼の住む世界の質の鋭敏な知覚の中で歓喜した” (Ibid.) として、色や香りや味わいや感触がばらばらの感覚でなく、一体となった状態で自然の事物に融合したものであることを指摘する。これは、人間が全存在で世界に関わるときの世界感覚の例証である。

さて、この融合の感覚は経験の初期にのみ現れるのもでなく、経験を貫き人間を支え続ける世界感覚である²⁸⁾。

私にとって、知覚は初め、明瞭なオブジェクトをもたない。形は後に現れる。それ以前にあるものは、ある独特の音楽的な精神のムードである。後に詩的な考えがやってくる (AE, pp. 191-2)。

シラーのこのことばを“芸術家も知覚者も同様に、全体的なとらえ、まだ分節化されておらず、構成員に区分されていない、包括的な質的全体とも呼べるものから始める” (AE, p. 191) 例として挙げる。そして、シラーの言葉を引き継ぐ形で、この全体的に看取する感覚ともいえるものが、“区分が生じた後も基層として残り続ける” (AE, p. 192) と述べる。そして、“混乱と葛藤のフェーズを通じて、根底にある調和の根深い記憶、岩に根付いた感覚のように生命をつきまとう感覚が残り続ける” (AE, p. 17)。これは、世界とのインタラクションに関わる人間が原初経験として抱く自然と調和する全体性の感覚が、知的探求のプロセスにあってもその生みの土壌として人間を支え続けるものであることを示唆している。このことは、デューイのインタラクション理論がその全過程を通じて、アレクサンダーが指摘する“状況”としての“it”に貫かれるものであることの証といえよう。デューイは、「人間性と行為」(1922)の中で、“この中心的な形状の回りには、ぼんやりとした、定義されない、区別されない全体の中で支えとなる背景が無限に広がっている。せいぜい知性は全体の小さな一部にスポットライトを当てることしかできず、その部分が運動の基軸を際立たせる”²⁹⁾と述べている。ここに、この全体性の感覚が、知性の行使が支配的になる段階にあっても、「人間の力」の証であることが明らかになる。そして、

以下テニソンの詩が示すように、それは人間が生きる世界の地平感覚である。

経験は弧、そこを通して
未踏の世界が輝く
その周縁は私が動く
永遠に永遠に見えなくなる

この詩から、デューイは“我々はかなたに横たわる何者かの感覚から完全に自由になることはない” (AE, p. 193) という解釈をなす。この全体性の感覚は、下記の引用が示すように、これまでみてきたあくまで自然になぎとめられた自然と連続するデューイのインタラクションの構造にあって、何か超越的な存在を意味するのではない。

自然への畏敬は必ずしも自然的できごとや世界のロマンティックな理想化における運命論的黙従ではない。それは我々がその一部である全体としての自然の感覚にのみ依拠するものかもしれないし、一方で我々が知性と目的に特徴づけられる部分であると認識することでもある³⁰⁾。

“ゆだね”の意味

さて、ここで重要なのは、全体性と融合の感覚はデューイにあって、原初的段階においてすら、無条件のゆだねの感覚ではないということである。確かに、全体的に看取する知覚である原初の状態は、“自己の知覚の中への完全なゆだね (surrender)” (AE, p. 258) の状態であることをデューイは指摘する。

嵐の海を満喫する人は、荒れ狂う海と、とどろく強風と、水に沈む船のドラマと自らの衝動を一体としている (AE, p. 258)。

この詩的ともいえる描写は、知覚の中に自己をゆだねる際の全体的に看取する状態を、具体的な比喩を通して語っている。しかし他方でデューイは述べる。

経験の美的局面あるいは経験を経る (undergoing) 局面は受容的である。それはゆだねを伴う。しかし自己の適切な身任せは強烈さを伴うかもしれない制御された活動を通してのみ可能になる。…素材に身を浸すためには、まずその中に身を投げ込まなければならない。…取り

入れるためには、エネルギーを呼び起こし、反応の調子に調整しなければならない (AE, p. 53)。

デューイは自己の対象への“ゆだね” (surrender) という表現を随所で用いているが、上の文脈からはデューイのいう自己の“ゆだね”が統制をなくした捨て身や忘我、無条件の身のゆだねではないことが示唆される。

“客観的素材に対し自己をゆだねるときも、彼はそのビジョンはゆだねない” (AE, p. 268), という記述はそのことを意味していると考えられる。対象への自己の“ゆだね”は、デューイにあっては忘我のための忘我ではなく、やがては自己を取り戻すための“ゆだね”である。このことから、“It experiences.”の“It”は、その中で人間が無になるような“状況”ではなく、後に知性が支配的になる“I experience.”の可能態を、原初から緊張感と共にはらむ“ゆだね”の状態とってよかろう。この“ゆだね”の状態にあってこそ“我々は自らを越えるところへと運ばれてその結果自らを発見する” (AE, p. 195) ということが可能になる。

このように、自己の“ゆだね”と回復の背中合わせの関係、あるいは“ゆだね”と回復がひとりの人間に内包されて初めてその人間の全体性が成立する、という姿にこそデューイはインタラクションに関わる人間の基本的なあり方をみていたことが、インタラクションにかかわる人間の状態をいわば内側からのぞくことによって明らかになる³¹⁾。ここにインタラクションを通じて自己は透明にならないということ、インタラクション「ゆえに」人間が力を発揮するようになることがどういうことかを解釈する上でひとつの鍵が見いだされる。インタラクションに関わる人間の世界感覚は、その全過程（原初段階から知的探求が支配的になるプロセスも含め）を通じて、無力感でもなければ傲慢さでもない。また、無条件の安住の感覚でもないし、支配感でもない。以下の引用がこのことを例証する。

経験に開かれ、その陶冶によって熟した精神は、それ自身の小ささと無力さを知る。…しかしそれはまた、その力と達成の若々しい想定が完全に忘れ去られる夢ではないことも知っている (EN, p. 313)。

デューイの活動の理論でとらえられる人間は確かにたえずエネルギーが放出されるという意味で力に象徴される人間像であるかもしれない。しかし、以上のようにそ

れが“ゆだね”と回復、無力さと力という全体の中の両極からなるものであることを考慮すると、単に「能動的な自己」や「アクティブな主体」という一面でだけでインタラクションの世界感覚をみようとするだけでは、デューイがインタラクションの基本的構造の中で描こうとした人間の姿、ひいてはインタラクション全体の真意に到達することはできないことがわかる。

結論そして新たな序論：“I experience.”へ

以上、「人間の力」が非常にクローズアップされて見える、デューイの有機体と環境のインタラクションの構造でとらえられる人間と世界のありかたがどのようなものであるのか、インタラクションの中に解消されず、インタラクション「ゆえに」人間が力を発揮することをデューイがいかにかに説明するか——この問いへの答えの第一歩として、特にインタラクションの原初状況で、人間にとって自然やモノを中心にした世界がいかにかに立ち現れるかという、基本的局面を中心に考察してきた。その結果、デューイの人間や世界のとらえかたの基盤となる考えは、当初思われたほどに「人」のみを「主語化」し、「人」が傑出するものではないことが明らかになった。それは“*It experiences.*”ということばに象徴される状況の理論であり、インタラクションの原初状態から、やがて人間が自然やモノを媒介に知性を発揮する局面も含めて「状況」という「一」に貫かれる理論であることが確認された。その「一」は、自然やモノの側からみると、人間と対等の立場でインタラクションに「参加」する自然やモノを描くものであり、人間の内側からのぞいてみると、原初経験としての環境との一体感、調和感に支えられているという「全体性の感覚」に象徴される。しかも、「全体性」や「調和」の感覚に身を“ゆだね”ることは自己をなくすことではなく、“ゆだね”と安住の中に力の感覚を予見し、力の感覚の中に“ゆだね”の記憶をたずさえる両面的な感覚である。デューイのインタラクション理論はインタラクションの原初段階であってすら、エネルギーの放出と緊張を伴う、決して状況に埋没することのない人間のありかたを、いわば最初から「人間の力」の萌芽、“*I experience.*”の可能態としてはらんだ、“*It experiences.*”の理論である。

しかし、ここで本稿の冒頭の問い——インタラクション「ゆえに」「人間の力」が発揮されるとはということか——は、やっと入り口に立ったにすぎない。本稿では、インタラクションを「ひとりの人間——モノ・自然」という一番基本的なレベルを中心に考察し、その結果

“*It experiences.*”の世界が「人間の力」の土壌であり続けることは確認された。ゆえに、本稿で扱った「力」は、どちらかといえば原初的な人間や自然の有機的エネルギーの部分に焦点をあてるものであり、目的を発見し、知的コントロールを行う人間の「力」が発揮されるメカニズムは十分に解明されたとはいえない。（前者の連続性の上に後者は存在するのだが。）デューイにあって、“*It experiences.*”から“*I experience.*”の誕生、人間が“*I*”として力を発揮してゆくことは、「ひとりの人間——モノ・自然」だけでは決して可能にならない。それはモノや自然を媒介にした「人間と人間のインタラクション」を必須の要件としている。すなわち、ひとりの人間にとって、他者は、インタラクションで関わる世界の一構成要素である。他者との関係である社会性を、本稿で論じた自然やモノと決定的にわかちものは、価値の対立や共有といった、倫理性の問題である。“*I experience.*”は、他者とのインタラクションを経て、原初的段階の“*I experience.*”の萌芽ともいべきものが質的転換を遂げて「人間の力」となっていくものである。この社会性、倫理性の問題を考慮にいれずして、“*It experiences.*”がいかにかに“*I experience.*”に移行して“*I*”が形成されるのか、の問いに答えたことにはならない。

しかし、にもかかわらず、本稿で考察した、人間がインタラクションの原初状況から一貫して、身をゆだねながらも状況に埋没することのないあり方、“可能性”の実現としてのインタラクションという基本的な構造は、“*I experience.*”として「人間の力」が発揮されてゆく基盤を明らかにしている。

（指導教官 佐伯胖教官）

註

*本文及び以下の註において、“ ”は引用原文のことば、「 」は筆者の表現を示す。

- 1) 本文中の下線部は、基本的に引用原文のイタリック部分を示す。例外的に筆者が下線を引くものは本文中にその旨を記す。
- 2) John Dewey, *Art as Experience* (New York: Perigee Books, 1980), 13. (これ以降は“AE”として本文中に記す。)
- 3) John Dewey, *Democracy and Education*, in *John Dewey: The Middle Works*, vol. 9, ed. Jo Ann Boydston (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1980), 302.
- 4) John Dewey, *Human Nature and Conduct* (New York: Henry Holt and Company, 1922), 85.
- 5) Thomas M. Alexander, *John Dewey's Theory of Art, Experience, and Nature: The Horizons of Feeling* (New York: State University of New York Press, 1987), 109. (これ以降は“AX”として本文中に記す。)

- 6) デューイの記述は、批判的知性の行使による問題解決によって葛藤を克服してゆく人間の力を浮き彫りにするものである。例えば、「人間性と行為」(*Human Nature and Conduct*, 1922)は、環境とのインタラクシオンによって人間の衝動が発揮され、これにコントロールを加える知性が発揮され、人間が意味と目的を発見してゆくプロセスが描かれる。
- 7) C. A. Bowers, *Elements of a Post-Liberal Theory of Education* (New York: Teachers College Press, 1987), 118.
- 8) Cornel West, *The American Evasion of Philosophy: A Genealogy of Pragmatism* (Madison: The University of Wisconsin Press), 101. ウェストは、「デューイ自らがエマソンに負うところを暗黙に認め、明示的に謳歌している」(p. 72)と、プラグマティズムの原点としてのエマソンがデューイに与えた影響を強調している。
- 9) John Dewey, *Experience and Nature*, in *John Dewey: The Later Works*, vol. 1, ed. Jo Ann Boydston (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1988), 183. (これ以降は“EN”として本文中に記す。)
- 10) Larry A. Hickman, *John Dewey's Pragmatic Technology* (Bloomington: Indiana University Press, 1990), 31-33. (これ以降は“HK”として本文中に記す。)
- 11) John Dewey, *On Experience, Nature, and Freedom*, ed. Richard Bernstein (Indianapolis: The Bobbs-Merrill Company, Inc., 1960), 236-7 in Alexander, *Dewey's Theory*, 101.
- 12) *Ibid.*, 238.
- 13) *Ibid.*, 220.
- 14) John Dewey, “Brief Studies in Realism,” in *John Dewey: The Middle Works*, vol. 6, ed. Jo Ann Boydston (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1978), 121.
- 15) アレクサンダーは、このプロセスにおいて人間が文化的存在であると同時に生物学的・物理学的存在であることが、人間の自然の“連続性”を可能にしている側面であると述べる(AX, p. 107)。
- 16) James Gouinlock, *John Dewey's Philosophy of Value* (New York: Humanities Press, 1972), 8 in Alexander, *Dewey's Theory*, 106.
- 17) Dewey, *Art as Experience*, 19 in Alexander, *Dewey's Theory*, 195.
- 18) John Dewey, *The Quest for Certainty* (New York: Minton, Balch and Co., 1929), 243 in Hickman, *Technology*, 180.
- 19) 「経験と自然」では、“意味あるいは精神の所有は自然に帰属する”(p. 219)とすら述べられている。確かに、アレクサンダーやヒックマンが浮き彫りにするように、デューイの究極的な力点は「主語としての人間の力」なのかもしれない。しかし、自然をも「主語化」するデューイの描写に改めて注意を払うことは、デューイによるインタラクシオンの構造にあって、自然やモノが果たす役割・意味の大きさを公正に判断する上で重要と思われる。
- 20) Dewey, “Realism,” 108-9.
- 21) *Ibid.*, 121.
- 22) *Ibid.*, 110.
- 23) きっかけとしての「源」は、上記の註21の箇所です。デューイ自身が述べる“物理的源”とは区別される。
- 24) Jo Ann Boydston, ed., *The Poems of John Dewey* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1977), 41.
- 25) *Ibid.*, liii.
- 26) 酒本雅之訳 「エマソン論文集(上)」(岩波書店 1972), 42 in Dewey, *Art as Experience*, 28.
- 27) ボイドストンは、芸術論におけるデューイの自然描写が「エマソンに準ずるアプローチである」(Boydston, *Poems* p. iv)と述べる。
- 28) アレクサンダーは、デューイの経験における全体性の原初の局面から、後に続く批判的識別の局面への移行について、デューイの、“自己のゆだねと反省のリズムがある”(AX, p. 144)ということばを引用している。確かに、デューイは、“原初のとらえ”(original seizure)、“オブジェクトへの身任せ”(yielding to the object)と“後に続く批判的識別”が平等に繰り返されると主張する(pp. 144-5)。つまり、厳密にいうと、本稿で「原初的経験の状態」としているものは、原初に限られるものでなく、デューイの“経験”は、「融合の感覚」がより支配的な状態や人間と自然の調和状態と、やがてその調和がくずれ、葛藤が生じ、識別と探求が支配的になる状態の繰り返しである。
- 29) Dewey, *Human Nature and Conduct*, 262.
- 30) John Dewey, *A Common Faith* (New Haven: Yale University Press, 1934), 25 in Boydston, *Poems*, p. iv.
- 31) 受容と働きかけのリズムについては、1934年の論文「創造と批判」の中で、息の出入りに比して“選ばれた印象を真に我々自身の働きかけの資本となるまで沈ませておく知恵”と“積極的なエネルギーをもって外に出す勇気”という形で述べられている。この論文は、批判という行為が単に外に向かうだけのアグレッシブな活動ではなく、受容と背中合わせであることを明らかにしている。